



新潟の水辺だより

Vol.35

●編集発行・新潟の水辺を考える会 ●発行日・1995年12月25日 Vol.35
●事務局 〒950 新潟市大学南1丁目7821-5 (株)グリーンシグマ内 Phone 025-263-2733 Fax 025-263-1134
●編集 〒950 新潟市河渡2-2-8 (株)サザンウインド内 Phone 025-271-7515 Fax 025-271-1884

TOPICS

「通船川の夢を語るシンポジウム」開催報告

ロールプレイングゲームとパネルディスカッションについて

放送部として壇上で話すことはありますが、パネラーとして、しかも専門家の方々の中で川について述べるのはやはり少し重荷でありました。しかし、近くにありすぎてよく見えずにいた通船川を、あらゆる立場・年齢の方のお話を聞き、全体像をとらえることができ、一層川に深い興味を持つことができました。

浅井 史緒

ロールプレイングゲームは、皆余りにも役にはまりすぎて（川の生物は除いて）少々堅くなってしまったようです。私としては、小学校区の立体地図模型が日の目を見たことを大変うれしく思いました。

浅井 敬一

「裏方さんの頑張り」

11月18日のシンポジウムに向けて大体の骨子ができている中で第3部に予定されているパネリストのメンバーがなかなか決まらない。11月の下旬である。私の焦った気持ちを星島さんにいうと「誰かいい人いませんかねえー。浅井さんのお嬢さんと田宮さん、猪股さんにはOKなんですけど・・・」

女性からの意見も必要・・・というのが私の言い分、何とかと鈴木 順子さん、山本ムツさんに直談判と電話をかける。運良くお二人から快諾をいただいて一安心。

さてさて、当日は参加者全員すっかり役者になりきって演じてくれた。石月さんのゴクラクトンボをはじめロールプレイングゲームでそれぞれの役割での問題提起はこれからの河川環境整備のあり方について考える一石を投じたのではないかと。参加者からとても分かりやすかったとの声を聞くことができた。

今回のシンポジウムの成功の立役者はなんといっても一人一人裏方さんの頑張りであった。このことで多くの市民が「川」を軸とした地域づくりへの夢が広がってくればと願う。又、通船川の近くには住みたたくない、という参加者が多かったが大熊先生のアドバイスにあったように通船川にはまだまだ手着かずの部分があるが故に、「楽しみのある川づくり」の可能性も充分にあると思う。

地域課題とどう取り組むかは公民館の課題でもある。潜在需要の掘り起こしをし、共に学び、共に育ち合う関係のネットワークづくりこそ公民館の果たす大きな役割でもあるから。

東地区公民館 梶 瑤子



通船川シンポジウム（撮影：杉山 泰彦）

「通船川ルネッサンス21」

シンポジウムを開催する夢は、私たちの会が発足と同時に描いた夢であった。その夢がこんなに早く実現出来るなんて夢ではなからうか、ほかに、もう一つ誰でも持っている夢、大企業の社長をロールプレイングゲームの中でやらせて戴きました。

多くの人様の前でゼネコン企業体の社長気分は最高である？・・・15分ほどのリハーサルで・・・よくやるね・・・役者揃いだからね。

通船川には、ヒゲの生えたフナもいま

す・頭の黒いトンボ（少し白かったかな）・メガネを掛けた材木・奇麗でカワイイ音サギもいます。

それは通船川に現在生息している植物、生物の代表が、精一杯お化粧し、着飾って人間に訴えたくて突如会場に現れた姿です。

すこし古いお話しですか、昭和43年、通船川・約8.5kmは低水路工事の完了で閉鎖型河川に変わったことは皆様ご存じの通りです。その1年後、44年の水質調査による汚濁度は山ノ下閘門では、BOD354～277mg/l（当時の標準値BOD・10mg/l）全国ワーストワンを記録し見向きもされない川になってしまった。

わずか1年で工場排水・生活雑排水・さらに木材の皮が腐食沈殿等が重なり悪臭を嗅ぐだけで人体に有害な影響を及ぼすまでになりヘドロで筏の曳航に支障をきたしたと当時の記録にあります。

昭和46年に阿賀野川の水を取り込むフラッシング事業を実施、現在に至っています。

水は流れることで浄化作用があるのは当然です。もう一つ大切なのは人の目にふれることです。この二つは水管理に欠くことの出来ない要素と思います。

残念ながら通船川に、この二つが欠けています。今、これから、今後とも私達は、通船川に足を向け、目を向け再生に取り組んでいきます。

これからも皆様方のご協力、お力添えをお願いすると共に、公民館（行政）と協力し出来れば企業の方にも参加して戴き一日も早く、植物さん、鳥さん、魚さん、トンボさん達が安心して子育て出来る川を実現させるため頑張りたいと思います。

通船川ルネッサンス21を代表して感謝致します。

1996年も良い年でありますように皆様のご多幸をお祈り致します。

星島 卓美

欧州紀行

欧州に行って来ました。ドイツとフランスです。

私の住む新津市では、市政40周年記念事業として市民を海外に送り出す研修事業を実施しています。それに応募したら、運良く研修生として選ばれ今回のヨーロッパ行となった訳です。

日程は、9月24日から10月1日までの8日間。毎回研修にはテーマが設定されて実施されますが、今回は「環境にやさしいまちづくり」でした。ですから、水辺の情報とは直接関係ないのですが、私にとって初めてのヨーロッパ見学記として読んでいただければ幸いです。

研修先の主なところは、ドイツはフライブルグ市、フランスはストラスブール市です。フライブルグと聞けば環境問題に関して詳しい方はご存じと思いますが環境都市として名高いところですが、今回の研修でもここがメインで、わずか1日という短い時間でしたが市の環境セミナーに参加し、いくつかの場所を見てきました。

私は建設省に勤務しているのですが、ヨーロッパに関する情報は文献などである程度は知っていたつもりですが、「聞くと見るとは大違い」のたとえどおり大いにカルチャーショックを受けて帰ってきました。



中世を色濃く残す美しい街並

街並みの景観の素晴らしさ（いいところだけ見てきたせいもありますが）公共施設の古いものも交えて、その質の高さには初めてであったこともあり驚嘆と言う言葉がぴったりでした。ドイツの場合は、日本と同じく第2次大戦の廃墟から復興して現在が

あるわけですが、50年の歳月を経て出来上がった街並みの美しさは、地震がない、災害が少ない、文化が違うなどと言っても、悔しいけれどここフライブルグ市に関しては認めないわけにはいきません。



トイレのドアと建物のデザインが素晴らしい

当たり前のことなのですが、街を構成している建築物のほとんどは個人が建てたものの集合体でできあがっているわけです。それがかくも見事に統一がとれ一体として美しい景観をなしているのを見て、こちらの人々の文化に対する考え方や、精神構造は一体どうなっているのかと疑問すら湧いてきます。社会資本を作る側にいる人間として、改めて考えさせられた研修でした。

次の世代にどのような社会を残していくのか、どのような社会がいいのか真面目に考えて見る必要があると感じました。（今まで何も考えてこなかったわけではないといい訳をしつつ）

今回の研修ではしっかりと予定が組まれていて、水辺を見る機会は、毎朝早起きして散歩に出たときくらいしかありませんでしたが、ここに紹介出来るような先進的な事例は見つかりませんでした。しかし、川辺に添って整備された公園のトイレのドアがあまりに見事であったので写真を撮りま

した。こうした公共施設や歩道の敷石に対するデザインの仕方は参考になりました。

グリーンツーリズムを一日だけですが体験する予定も組まれていて、黒い森奥深くの小さな村で宿泊してみました。その家は、同じ家の中に牛も同居していて、遠野の曲り屋の西洋版です。なにやら子供のころ嗅いだ懐かしい牛の糞の臭いが外には漂っています。いわゆる民宿ですが建物がしっかりしていて、新しい建物でないのですが清潔でした。

バカンスのような長期間の滞在ではやはり快適さが不可欠です。この点では、日本はまだ一泊二日か、せいぜい三泊四日に耐えられる施設が多いのが実状ではないでしょうか。日本でも農水省の管轄と思いますが、'92年からこのグリーンツーリズムの制度を導入していますが、これが定着することによって過疎地の活性化につながるような良い意味での真似はしてもいいと思います。これによって日本の中山間地の自然環境を守る事が出来れば最高です。

もう一つの視察先ストラスブール市は、ライン河から20km弱フランスに入ったところです。わずかな距離ですがもうドイツとは違った雰囲気があるのです。ドイツの、こう決めたら何が何でもそのとおり実行していく、と言うような硬さが和らぎ自由の香りがするのです。街はその分いくらか汚れていきますが、ほっとする気がしたのは私の気のせいだけではないと思います。しかし、ここの市長は凄く、選挙の公約に自動車交通を市内で削減するため市電の復活を掲げ、見事当選を果たし任期五年のうちにその公約を実行し、モダンな市電が市内を走っていました。



主役は牛。胸をはって農業をしている

これは公約ですから当たり前と言えば当たり前のことなのですが、実際に五年と言う期間で議会工作をし、予算を確保し、中央駅の

前面に地下駅を作って市電のネットワークを作る事は相当難しい事だと思います。この実績で再選を果たしたそうです。この市長は女性です。大したものだと大層感心しました。どこかの国の政治家も見習う必要がありそうです。



テラスのカフェ、ワインを飲みたくなる

ストラスブール市には、プチフランスと呼ばれるアルザス・ロレーヌ地方の伝統的な木組みの家が沢山残っているところがあります。そう広くない地域ですが観光客の多いところ。古いものでは400年以上も経っているものもあり、木造家屋の耐久性も捨てたものではありません。

このプチフランスは何とも素敵なところで、もともと皮のなめし職人と漁師の街だったそうですが、荷の運搬のため運河が引かれていて、美しい景観を作り出しています。運河上に張り出したテラスの上にはカフェがあったりして楽しいところです。運河には古い閘門があり現在でも立派に役割を果たしていて、素敵で乗ってみたいような観光船が優雅に通ります。アルザスワインでも飲みながら船旅してみたくなりました。

いい話だけを書いてきましたが、ヨーロッパは深刻な失業問題を抱えて極右勢力の台頭など、暗い面もあります。これからこの近代文明の発信地はどのような方向に進んで行くのでしょうか。気になるところです。こうした事が今までより身近に感じられてくるから旅とは不思議なものです。

と言うわけで、ガーンとカルチャーショックを受けて欧州から帰ってきました。

完
和田 日朗

アートの妖精が棲む街
「ファーレ立川」を見学して

アートとは何だろうか。アートにどれほどの力があるのだろうか。今年の11月に見学した「ファーレ立川」はアートで都市と人、人と人をつないだユニークなまちづくりをしていました。水辺の会の趣旨とは関係ないかもしれませんが一見の価値があると思いましたのでここに紹介したいと思います。

1994年の秋、JR中央線立川駅北口5分のところにある5.9ヘクタールの米軍基地跡地に再開発事業として新しい街が生まれた。ホテルやデパート、映画館、などの建物からなるまさに複合都市である。



山口啓介／記憶の地図（開発後と開発前）

この街を一人のアートプランナーと36ヵ国92人のアーティストたちが、換気口、排気塔、機械搬入口、ベンチ、サイン、街灯、車止め、など街の機能をアートへと変えてしまい、全く新しいイメージの街をつくりあげた。ア



ニキ・ド・サンファル／会話

トは従来の美術館の中に納まるでもなく、モニュメントとして近より難しいイメージを放つものでもない。それは、市民を暖かく迎える道祖神であり、毘沙門天をイメージしたものであるという。ニキ・ド・サンファルのカラフルな椅子はいつも誰かが腰掛けており、アートは市民が思いっきり触れ親しまれることによりその存在をますます輝かせ、街へとなじんでいっているようだ。結構キズがあったり、汚れたりしているので驚いたがそれでいいのだと関係者は言う？昼の顔もあればネオンサインを使った夜の顔もある。

「驚きと発見の街」がファーレ立川のキャッチフレーズだ。思わぬビルの間隙に一流アーティストの作品があったりする。こうした思わぬ出会いが、何かを感じ、この街を訪れる人の記憶に残っていくのだとアートプランナーの北川フラム氏が話してくれた。都会でありながら人間を再生し育てくれる森のイメージを想定した作品の数々が、多様な生命の如くかすかな声を発しているとも言う。街の記憶、笑い、共感、個性、つながりであったりする。アートを通じた同時代へのメッセージが「ファーレ立川」にあった。

（株）伸デザイン 清水 伸（非会員投稿）

ホソミオツネトンボ

アオイトトンボの仲間で、水色の胴体と、くすんだ銅色をした紋をもっている。

一度に大量の個体数を確認したことがないので、減少しているか、羽化地を離れてばらばらに生活する習性があるのだろうか。

このトンボは成虫のまま越冬する珍しいトンボ。木の皮や、戸袋や人家の中で冬を過ごすというが、近ごろ隙間のない家が多くなったので困っているのかも知れない。



それでは、皆さん良い越冬（マシ）を。

石月 升

空を飛び移動する水草

水草の分布には不思議な点が多い。陸上の植物に比べ、世界的に広く分布している。日本でもヨーロッパでも、同じような水草が生えている。水草は常に上流から下流へ流されてゆくにもかかわらず上流で水草が絶えてしまうことはない。今年は松浜の池に突然オニバスが出現した。

この水草の移動を助けているのはたぶん水鳥であろう。例えば、水鳥が福島潟でオニバスの種子を飲みこむ。鳥は空を飛んで移動し、松浜の池でふんをする。ふんの中の種子が発芽し生長する。その他鳥の足に水



バイカモ (撮影:高橋 正良)

草の切れ端がつき、遠くに運ばれることもあるだろう。一見限られた水域の中にとじ込められているように見える水草であるが、その分布の拡大の方法は、意外にダイナミックである。

笹原 治

ムクドリ

冬になると庭先でピーピー・ギョルギョルと鳴くこのムクドリ。昆虫や木の実を好んで食べる。一年中身近なところで見ることができ、群れをなして行動する。全長（くちばしの先から、尾の先まで）は約24cmで全体的に茶褐色で、腰は白い、くちばしと脚の黄色が目立つ。空を飛ぶ姿は三角定規（二等辺三角形の方）によく似ている。今の季節は、庭先の柿の木に群れていたたり、家の近くの電線にビッシリと並んでいたりする姿が目につく。

ムクドリを見ると、柿の木等を収穫する際、小鳥たちも冬を越せるようにと、木のとっぺんの実をいくつか残しておくという



柿をついばむムクドリ (撮影:高橋 正良)

昔の風習を思い出す。

一昨年からムクドリも鉄砲で撃って良い鳥になったとのことである。

杉山 泰彦

ゆだねる

田中 カツイ

いつ頃からだろうか、流れにさからい始めたのは。流れに身をゆだねると、置いていかれそうな不安が身体中に広がって急ぎ続けてきた日々。「ゆだねる」という言葉すら忘れかけていた。

九十歳を過ぎて三、四年前に他界した義理の伯母の往年の姿を聞く機会を得た。燕から新潟の女学校へ通うという日。家の前近くの船付き場から船に乗り、中之口川を通り、信濃川へと流れにゆだねて下っていった。袴をはいた女学生の伯母の姿が川面に映り、絵のように美しかったという。九十歳を過ぎての永の旅立ちの顔も本当に美しい人であった。送る夜、親戚が集まっての間はず語りの話を耳にしたこの光景がこの頃、自分もその場に居合わせていたように鮮明な映像となって目に浮かぶ。

その川が姿を変え始めた頃から人も流れにさからい出して生きるようになった。その結果疲れ出した人々。その中に疲れている自分をどうしていいかわからなくなり、助けて！と叱び出したのが子供達だ。不登校、いじめ、非行・・・と次々に子供達が出してくるサインを社会も大人も真剣に受け止めようと努力している筈なのに、虚しい手応えしか戻ってこない出来事が続く。

子供に大地を返したい。大地が雨を吸い込んで、ゆっくりと温もっていくことを体感させたい。雨の一滴が流れになっていく場に誘っていききたい。ゆったりと流れるリズムを身体中にとらえさせたい。

音楽・イルカ・香・絵・・・さまざまな癒しの試みがなされている（おなかの子供と一緒にイルカと泳いだという人がいる。会って話を聞いてから、この原稿を書こうと思っていたら、締切日が面会日だったのでお預け）

この癒しのフィールドとして川をクローズアップしてみたい。川は共生の時代の課題解決の鍵をにぎっているかもしれない。共生は「響生」。鳥も魚も植物も人も……。響生しあっていく中から、ゆるやかなリズムが戻り癒されていく。子供達にこの「ゆっくりさ」に「ゆだねて」いいのだ。大きな声でいわなければ、そういう社会を築いていくアクションを起こさなければならない時が迫っている。

二十一世紀流の船付き場から船に乗って信濃川の流れにゆだねていく美しい響生のフィールド。その絵を鮮明にしたいものである。

新潟の水辺99選
ふくしまえ
福島江（長岡市）

八木 栄子

長岡駅の東口を出て、山を正面に見ながら歩いて行くと、すぐに橋が見えてくる。そこが福島江用水路で、私は川沿いに家があったため、長岡を出るまで、ほぼ毎日福島江を眺めていたことになる。当時は、それこそコンクリート三面張りのこの川に対して、なんら特別な感情はもっていなかった。ただ、毎年お花見の時期になると、親戚の人達が来て、窓を開けて桜を眺めていたこと、川に石を投げて遊んだこと、洪水の次の日に錦鯉が流されてきたこととかが印象に残っている。

それでも、桜の葉の色の移り変わり、川の水量の違いで四季を感じ、通学途中は川沿いの家の人達がきれいにしている小さな花壇が目を楽しませてくれた。福島江はそんなふうな日常の風景として、地域の人達と共にあったような気がする。それは、コンクリート三面張とかの問題ではなかった。

今は、桜の時期になると昔よりもたくさんの方が散歩にくるようだ。私の知っている福島江はほんの数百メートルだけど、町の中の日常風景として確かに息づいていた。



会員紹介

MEMBER'S

S



旗野 秀人



いつかは入会したいと思いつつ、ようやく果たせました。阿賀野川の再生はもちろん、町の中に流れていた小川の再生も楽しみながら実現できればと願っているところです。宜しくお願いします。



中矢 澄子



鳥取県倉吉市生まれ。花と緑を通じて「人と人、人とモノとの素敵な出会い」をコンセプトに「工房 花さかじいさん」を設立して8年。緑化プランナー、フローラルアーティストとして活動しています。今までに7つの街で暮らしてきました。新潟が終の住家になるよう、潤いのある街づくりに役に立ちたいと思っています。趣味おしゃべりと旅行。



金巻 とよじ



自然は「優しいもの」と思い込んでいたやさきに、阪神大震災が起った。そして被災地での若者のボランティアを見て、やはり人間は「互いにたすけあうもの」と学んだ。それもつかの間、オウム事件が起った。我々はまだまだ、『自然や人間』について深く知らないようだ。



福井 義隆



今回、高橋 正良さんの紹介で入会しました。“河は遊びの場”と思っていますし、私自身あらたな視野を広げたいと思いますので、よろしくお願いします。



近藤 康市



刈羽郡小国町生まれ、現在新潟に在住。春夏秋冬毎朝鳥屋野潟をながめるのが楽しみ。冬場はカモ、白鳥の楽園。カヌー遊びはおあづけ。

趣味は、アウトドアアクリレーション、特に身近な鳥屋野潟は色々楽しませてもらっています。豊富な水と自然をいつまでも残してもらいたい。



中山 修



通船川のシンポジウムから入会。

新発田市に生まれ、平成5年に結婚してから新潟市太平に在住。現在、可愛い娘とともに3人暮らし。

趣味は、娘をおおい、やすらぎ堤までのサイクリングですが、最近は寒いのでご無沙汰です。

EVENT & BOOKS

イベント情報

1 シベリア自然探訪紀行

日 時 ● 1996年1月22日(同)・1月29日(同)・2月5日(同) 午後1時30分～3時30分
 場所/申込先 ● 東地区公民館304号室 (025-241-4119)
 内 容 ● 「シベリアの原生林と川」、「水と緑が織りなす大自然」、「21世紀の自然と人間との共存」講師：自然案内人井上 信夫、対象30人、参加費300円

2 自然セミナー（世界の自然と人々）

日 時 ● 1996年1/23(火)・1/30(火)・2/6(火)・2/13(火)・2/20(火) 午前10時～12時
 場 所 ● 東地区公民館 (025-241-4119)
 内 容 ● 「パタゴニアの自然と植物」、「和州の人々と花」、「山にみる環境保全」、「ガム湖の植物」、「モゴ湖平原の魚と人々」、対象：一般成人40人、参加費：500円（資料代等含む）

3 開港5都市景観会議新潟大会

日 時 ● 1996年2月3日(土)～2月4日(日)
 場 所 ● 1日目/佐渡汽船5階ホール 2日目/万代市民会館他
 内 容 ● 1日目/13:00～見学会 15:00～全体会議 17:00～交流会 2日目/9:00～ワークショップ 13:00～全体総括会議 14:30閉会
 主催：開港5都市景観会議新潟大会実行委員会 (025-226-2807)

書籍情報

1 「第三回自然環境復元海外調査団報告」

内容 ● この報告書は自然環境復元研究会と日本ビオトープ協会が主催し、1995年8月二週間にわたるドイツ・スイスの調査を元に作られている。日本各地の研究者やコンキル、行政の有志によるミュンヘンを中心としたアウトバーンや河川の調査およびフライブルグを中心とした環境都市調査、チューリッヒを中心にしたまちづくりや河川調査から成り立っている。
 入手希望の方は422静岡県富士見台1-19-72日本ビオトープ協会Phone054-281-3459または水辺の会編集鳥(長)高橋まで、一部1,500円。

2 「アラッハの森」パンフレット

内容 ● このパンフレットはバイエルン州最高建設局が行った、ミュンヘン郊外のアウトバーン建設にともなう森の調整措置の広報に用いるため作成された。日本語訳出版についてはバイエルン州をはじめ自然環境復元研究会静岡県支部代表の蒔水 久雄 氏およびマサコ・シュワルツネッカーさん、新潟大学積雪地域災害研究センターの丸井 英明 氏のご協力をいただいた。水辺の会ではカラー印刷し、一部200円でお分けします。



書籍紹介1



書籍紹介2

編集後記

●松浜トンボ愛好会では阿賀野川右岸河口部にあるひょうたん池通称松浜とんぼ池に住む貴重なイトトンボなどの保全と保護のため、新潟市に対して池周辺の公園化の請願を行いたいと考え署名活動を開始した。身近な自然を失ってしまった現在、新潟の砂地にわずかに残るこの池や小動物達を守るこの意義はたいへんに大きい。漁港建設やマリナ建設が浮き沈みする中、人間の生活といかに共存するか、来年もしっかり考えて見たいと思う。

●洋菓子「やすらぎ堤」

信濃川下流にできた「やすらぎ堤」にちなんだ長細いパイがある。パイ生地にスライスしたアーモンドを乗せフォンダン(すり蜜)をかけた実にシンプルなものである。これを県外の方にお土産としてもって行ったのだが、残念ながら信濃川やすらぎ堤の説明が何にも入ってなかった。そこでこれを販売している池さんと相談した結果、包に入れるコピーやイラスト、写真などを募集し、コンテストを開催することにした。1996年3月末日まで作品を編集鳥までお送りください。当然ながら審査委員長は大熊会長、審査委員は池さんと世話人などとなります。ご意見ご希望も一緒にお寄せください。賞品はお楽しみに。

『新潟の水辺を考える会』ご案内

この会は、遊び半分・真面目半分で活動しています。
 ウォッチングには、家族ぐるみで子供達も一緒に参加したりしています。
 自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。
 今までとは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までとは違うものに見えてきます。新しい発見があります。

自分の世界もまた少し広がってきます。

この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。

□設立年 1987年10月1日 □目的 水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。 □代表者 会長 大熊 孝(新潟大学工学部教授) □会員数 個人118名 法人9団体 □活動①水辺シンポジウムの開催②水辺ウォッチング③会報「新潟の水辺だより」④水辺環境整備に関する学習会⑤長野県富山県の水辺グループとの交流会 □年会費 個人会員2,000円 賛助会員(法人など)10,000円

入会申込書

年 月 日

フリガナ氏名	年 齢	職 業
男・女		
住 所 電話番号	〒	〒
☎ () -		☎ () -